

# 大学のキャリア教育における労働問題の 理解に向けた教育の意義と効果

末 廣 啓 子

宇都宮大学教育学部研究紀要

第66号 第1部 別刷

平成28年（2016）3月

# Meanings and Effects of Understanding Labor Issues in University Career Education

SUEHIRO Keiko

# 大学のキャリア教育における労働問題の 理解に向けた教育の意義と効果

## Meanings and Effects of Understanding Labor Issues in University Career Education

末廣 啓子<sup>†</sup>  
SUEHIRO Keiko

### 概要 (Summary)

本研究は、労働の様々な問題を幅広い観点から理解するためのキャリア教育の一授業の教育効果を検証したものである。労働問題の理解とは、個別の労働の実態や対策・課題の理解に留まらず、それぞれの背景には社会・経済・政治や人々の意識・行動のダイナミックな動きがあり、こうしたダイナミズムを理解しそのような社会の一員として生きていく存在としての自分を認識し、そこから社会を支え、また、変えていくのは他ならぬ自分たちであるということにまで思いが至ることであると考え、授業を展開した。授業受講者のアンケート調査の統計分析とレポートの記述の分析の結果、①一つの授業項目ごとの理解・関心（一部を除く）が高まると共に、一つの理解が別の項目の理解を深めたり、関心を引き起こすなど、相互に影響を及ぼしあって理解が進んでいくこと、②そういう過程を通じて、個々の学生が主体的に自らの将来のキャリア形成や具体的な進路選択と、今何をすべきかを考えるきっかけとなり、さらに、意識変化、行動変化に繋がり得ること、③職業人となった後の主体的に社会と関わる態度にも繋がる可能性があること、がわかり、こうした教育が、キャリア教育において持つ意義と可能性が明らかとなった。また調査結果からは、労働法や労働組合についてのいわゆる労働法教育が必要であることもわかった。

キーワード：キャリア教育 大学 労働問題 理解 教育効果

### 1 問題の所在と研究の目的

ここでは、労働問題の理解に向けたキャリア教育を実施している背景として、キャリア教育をめぐる議論を紹介し、そうした議論の論点に対する著者の考え方及びキャリア教育プログラムについての考え方を述べた後、本研究の目指すところを述べる。

#### (1) キャリア教育をめぐる議論

2004年に文部科学省は「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」を公表、それを契機にモデル校を指定するなど学校におけるキャリア教育の導入を積極的に推進するようになって既に10年以上が経った。この間、各学校段階において職場体験等のキャリア教育の取り組みが行われてきたが、現場においては、教員のキャリア教育への理解、実施体制の整備を始め多くの問題が山積している（末廣、2013a）。大学においても2000年の前半に多くの大学でキャリア教育への取り組みが開始され、以降も様々な取り組みが行われてきた中で、2011年には文部科学省

<sup>†</sup> 宇都宮大学 キャリア教育・就職支援センター（連絡先：suehirok@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

が、設置基準を改訂し、大学教育における必須の活動として行うことが求められるようになった。

こうした文部科学省のキャリア教育政策に対して、この間、幾つかの問題点が指摘されてきた。例えば、グローバル化に伴う経済・労働の大きな変化や、社会的ネットワークやコミュニティの消滅等の社会の変化の中で、キャリア教育が本来教育が引き受けられないことまでを引き受けようとしてきたのではないかと、或いは、キャリア教育は、子供と若者の労働観や職業意識を育成することを目指し就業意識や意欲を高める教育に傾斜し、現状の労働市場や企業の雇用方針に対して「適応」の論理を大前提にした適応主義的な教育となっていて、「抵抗」するという視点が欠落しているのではないかと、「基礎的・汎用的能力」を向上させるための教育に熱心で、職業に求められる知識や技能、能力を育成するという職業教育の観点が軽視されているのではないかと、などである（児美川2007、2010、2014、本田、2009、乾、2012等）。さらに、「抵抗」の術として、労働法や労働組合について学ぶ労働法教育の必要性が唱えられてきたが、特に近年ブラック企業、更にはブラックバイトの問題が出てきた中で、その必要性が一層認識され、実践・研究も行われている（上西、2015、本田、2014等）。政府においてもようやく、厚生労働省が研究会を設置して2009年に「今後の労働関係法制度をめぐる教育の在り方に関する研究会報告書」を公表、その後、ハンドブックやウェブサイトの制作、地方労働局と大学による講座の開催、文部科学省と厚生労働省の連携による学校への文書発出等学校における労働法教育の普及を図るようになった。

キャリア教育が本来教育が引き受けられないことを引き受けようとしてきたのではないかとという指摘は重要で、そもそも適切なキャリア教育を経て必要な能力や意欲を身に付けたとしても、学生が企業の中で意欲を維持して成長を実感できるような、長期的観点から人の問題にきちんと対応しようとする経営方針を持つ企業等の雇用の場がどのくらい社会にあるのか、また、ケアの必要な人に対する「居場所」機能を社会全体としてどう確保するのか、これらは社会全体としての大きな課題であり、キャリア教育の現場にいる者は危惧しながら日々学生と向き合っている。様々な産学連携の試みやネットワークの構築の中で教育関係者が教育の側から哲学を持って必要なことを関係者に向かってもっと問題提起していくことが重要ではないかと考える（末廣、2013b）。また、労働法教育については、多様化した厳しい社会の中で身を守る術として重要であることは明らかであり、職業教育に関しても、日本的経営が変わらざるを得ない中で、職業に関する専門の知識、技術を身に付けて社会に出ていくことは自分らしい生き方、働き方を全うするための強み、武器となる可能性が高まっている。しかし、職業教育を考える前提として、個々の産業・職業の将来見通しとそれに必要な職業能力の把握は非常に難しく、また、職業教育を誰が、誰に、どの時点で、どのように、実施するのか等具体的にあるべき職業教育を実現していくに当たっては、慎重で周到な検討とプラン作りが必要である。そして変わりつつあるとはいえ、いまだ人を仕事に貼り付けるというメンバーシップ型労働社会である日本の労働市場の現実（濱口、2009）や、仕事に人を張り付けるという欧米型のジョブ型社会に対応したジョブ型社員の必要性の議論が「解雇しやすいか否か」の議論と錯綜しがちな現実と将来動向を十分に見極めながら進めていくことが求められるのではないかと考える。

一方、キャリア教育と学習との関連という視点から、キャリア教育は単に将来展望を考え、その実現に向けたプランを作らせるだけでなく、学習への動機づけとなりうる学校教育における重要な活動であると認識されるようになってきている。文部科学省も中学校新学習指導要領（2012～）の解説に「学ぶ意義の実感にもつながることを踏まえて」と記述するようになり、中央教育審議会の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011）にも「生徒・学生等の

学習意欲を喚起することの大切さ」が記載され学習への動機づけということを現場に向けさかんに言うようになったようである。経済産業省の「社会人基礎力」（2007）は中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（2008）で示されている「学士力」と重なるところが多く、キャリアと学習とをつなぐ研究も始まっており、キャリア教育を学習につながるものとして広くとらえる意義を指摘して将来展望と日常生活への接続が学習に与える影響についての研究も行われている（溝上、2013）。

## （２）大学におけるキャリア教育のありかたと一つの実践

本研究は、こうしたキャリア教育に対するさまざまな議論がある中で、以下のようなキャリア教育の考え方に立ち大学で長年に亘り実践してきたプログラムの１つについて、その効果を検証しようとするものである。

キャリア教育とは、起こり続ける変化に対応して、主体的に自らのキャリアをデザインし、進路を切り開いて生きていける力を身につけさせる教育と考える。それは、社会や企業等の環境の変化に対応して生きていく力のみならず、時には進路を切り開くため、社会や企業等の組織を変革していくことも必要で、そのために必要な能力が含まれると考えている。したがって、キャリア教育は担当部署だけで担う特別な何かというよりも当該学校の目指すトータルな教育そのものであるといえ、専門的な知識や技術への学びとその過程で身に付ける論理的な思考、或いはこうした日々の学びの中で身に付けるべき他者とのコミュニケーションや人間関係構築の力等専門の分野での学びの役割も大きい。こうした基本的な考えの下で、とりわけ、大学生の現状<sup>\*1</sup>を踏まえて、以下のような観点からの教育が必要と考える。

①具体的な進路選択とは社会や組織の現状や見通しと本人の望む生き方・働き方との摺合せであり、社会や組織の現状や見通しについての理解が不可欠である。まず、自分が出ていく社会への関心と働くことに関する現実の正しい理解を進め、視野を広げることがその後の適切な進路選択・就職活動に必要である。特に、近年グローバル経済化と技術進歩を背景に産業・職業構造の変化や雇用就業形態の多様化が進む中では極めて重要である。自己と向き合って自己理解をすることももちろん不可欠であるが、特に社会に出たことがなく、多様な世代とのリアルな触れ合いの機会が少なくなっている若者については、現実に触れ現実を理解することがまず自己理解のきっかけとなり得る。②労働法や労働組合などについて教えることは極めて重要であるが、得た知識を理不尽な社会の状況に「ノー」という場面で活用するためには、若者側に主体的に問題を解決していこうとする意欲や能力が必要である。また前述のように社会を変革していく存在として育てるにあたって、いわゆる「基礎的・汎用的な能力」に含まれているような基礎力や意欲・関心をどう教育の場で育むのが課題とならざるを得ない。しかも、大学生の現状を踏まえると社会への移行が待ったなしの大学においては取り組まざるを得ない現実的な喫緊の課題となっている。そのためには、討議の時間を組み込んだ授業や課題発見・解決型の長期インターンシップ等の新たな多様な教育の試みが必要である。③同様の問題意識から、チャレンジ精神やシーズを形にし事業化するための緻密なプラン作り等を含む起業家教育の重要性は、2000年以前から指摘され始めていたが（末廣、1998）、いまや、キャリア教育と共通の視点を持つものとして、起業する場合のみならず若者の起業家精神

<sup>\*1</sup> 私見ではあるが、近年の大学生には、コミュニケーションの力が不足、チームワークが苦手、議論をしない、批判しない（とりえず受け入れる）、SOSを発しない、失敗を恐れるというような傾向が見受けられる（マニュアルや親の指示で育ってきて自ら考えて対処するという経験をしないまま大学まできてしまった、自ら工夫して遊んだことがなく遊びの中で身につくはずの他者理解や他者との距離の取り方、関係構築が困難になっている、経済が右肩下がりかつ相対的に豊かな社会で生まれ育ってきた、等が背景として考えられよう）。

の育成の観点からも低学年での実施の意義が増していると考えられる<sup>\*2</sup>。また、学生の側でも、こういう活動に関しての意欲や興味は高まっている。

以上の考えの下に、国立大学法人宇都宮大学においては2007年より複数のキャリア教育科目の授業と授業以外のシンポジウムやインターンシップ等の諸プログラムを実施してきた。その中で、特に特徴ある授業科目として労働問題を理解することをねらいとした「人間と社会」（具体的な授業内容は本稿末の参考資料1を参照のこと）を当初より開講してきた。（半期、2単位、1,2年生に受講を推奨しているが、全学部、全学年を対象としている。ここ1,2年は、入学時のガイダンスでの呼びかけのせいか、受講生は1年生がほとんどとなっている）

この授業のねらいは、「近年、経済・社会の変化に伴う人々の働き方や企業等の働き方が大きく変化していることを背景に、自ら主体的に生涯を通じて生き方・働き方を考えていく必要性が増している。そのためには自己を知ることとともに、社会や経済、産業、職業など働くことに関する現実を正しく理解することが重要であり、この授業では、自分がどんなキャリアデザインを描くのか、どんな大学生活を送ったらよいか、どんな職業選択をするか、を考える材料ときっかけとして、まず、大きく変容している経済・社会、産業そして、企業経営・人事方針、働き方の変化、職業の実態などを正しく知る」というものである。すなわち、この授業を通じて、今起こっている様々な労働の実態と問題、企業経営の動向と人事政策の変遷、産業・職業の実態、働く側の意識・実態等幅広い視点から最新の知識を得て理解するとともに、それを通じて、自分の将来のキャリアをどう描くのか、そのためにどのような大学生活を送るべきかについて深く考えるようになることが期待されている。

### （3）研究の目的

本研究は、前項で述べた特徴的なキャリア教育科目である「人間と社会」について授業のねらいと効果について考察するものである。

期待される効果を仮説として整理すると以下の通りである。

- ①学生の労働問題（実態、問題点、法制度・対策、働く人との出会い等）についての理解と関心が深まる、すなわち、
  - ・労働の各授業項目ごとに理解と関心が深まること
  - ・一つの授業項目の理解が別の項目の理解を深めたり、関心を呼び起こすなど、相互に影響を及ぼしあって理解が進んでいくこと
- ②以上によって、さらに、自分のキャリア、働くということ、職業等についての理解と関心が増し、
  - ・将来のキャリアデザインに向けて取り組もうと考えるきっかけになっていること
  - ・大学生活でやらなければならないことの理解が進み学業等への意欲が上がること
- ③就職後、社会や会社の問題の改善に、自分から主体的に取り組んでいく姿勢が生じること
- ④以上の変化が日常生活の中で具体的な行動に結びついていること

## 2 調査対象者と調査方法

毎年前期に開講している「人間と社会」の2015年度受講生（全学部、全学科対象。初回出席者177名）を対象とし、授業の初回と最終回に同じ内容のアンケート調査（アンケート調査票は本稿

<sup>\*2</sup> 日本ベンチャー学会第17回全国大会（2014）ではパネルディスカッション「アントレプレナーシップ教育とイノベーション人材の育成：ポスドク研究者・博士課程学生のキャリアパスの多様化」が行われ起業家教育について同様の議論が展開された。



末の参考資料2を参照)を実施し、授業項目ごとに理解度、関心度に差があるかどうかを調べる。

回収したアンケートの内、履修を継続して授業前・後の2つの調査に回答し全ての項目に記入漏れのない学生85名を分析対象とした。内訳は、学年別には1年生 81名、2年生0名、3年生2名、4年生2名、学部別には、国際学部3名、工学部47名、教育学部16名 農学部19名。但し、学年、学部ともデータの偏りが大きいため、属性別の分析は行っていない。

また、最終回到授業全体の感想を記したレポートの提出を求め、記載された内容を分析した。レポート提出者は129名、内訳は、学年別には1年生124名、2年生0名、3年生3名、4年生2名、学部別には国際学部7名、工学部64名、教育学部24名 農学部34名。アンケート調査と同様に、属性別の分析はしていない。

さらに、参考として、都心のA大学(私立、文理合わせて9学部、1学年約3000名 河合塾(2016)による偏差値50台後半～70台前半)で開講しているほぼ同内容の授業の受講生(ただし、全学部の教職必修課程の学生対象)に対し同様のアンケート調査を実施したので、その結果を簡単な比較に使用した。有効回答数は、初回92名、最終回62名であった。

### 3 調査結果

#### 3-(1) アンケート調査の結果(仮説①, ②)

##### 3-(1)-1 統計分析結果

##### a 記述統計

アンケートの中の「理解」についての各授業項目毎の平均点は表-1の通りであった。同じく「関心」については表-2の通りであった。さらにこれを図示すると図-1と図-2の通りである。

表-1 授業項目別：理解(初回・最終回平均点)

N=85

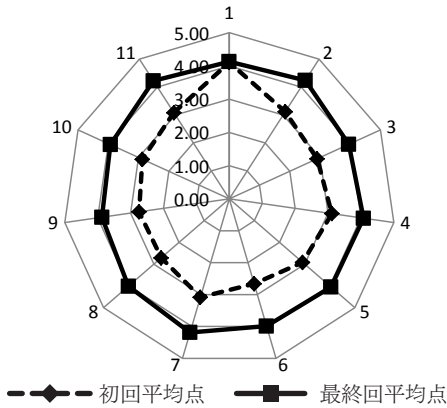
授業項目	理解①	標準偏差	理解②	標準偏差	理解③	標準偏差	理解④	標準偏差	理解⑤	標準偏差	理解⑥	標準偏差
初回	4.11	0.673	3.12	0.956	2.91	0.971	3.12	0.993	2.92	1.014	2.66	0.970
最終回	4.13	0.593	4.24	0.648	3.95	0.800	4.08	0.743	4.05	0.785	3.99	0.779
差	0.02	-	1.12	-	1.04	-	0.96	-	1.13	-	1.33	-
授業項目	理解⑦	標準偏差	理解⑧	標準偏差	理解⑨	標準偏差	理解⑩	標準偏差	理解⑪	標準偏差		
初回	3.08	0.862	2.71	1.033	2.74	0.966	2.87	1.009	3.08	1.049		
最終回	4.19	0.681	4.01	0.794	3.87	0.784	3.93	0.737	4.22	0.713		
差	1.11	-	1.30	-	1.13	-	1.06	-	1.14	-		

表-2 授業項目別：関心(初回・最終回平均点)

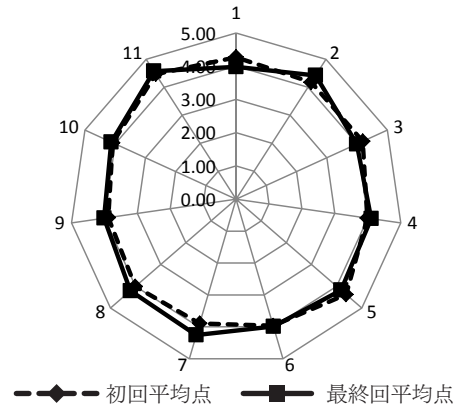
N=85

授業項目	関心①	標準偏差	関心②	標準偏差	関心③	標準偏差	関心④	標準偏差	関心⑤	標準偏差	関心⑥	標準偏差
初回	4.27	0.662	4.18	0.789	4.19	0.732	3.99	0.866	4.38	0.672	3.96	0.944
最終回	3.98	0.766	4.42	0.679	3.99	0.838	4.11	0.817	4.18	0.833	3.99	0.866
差	-0.29	-	0.24	-	-0.20	-	0.12	-	-0.20	-	0.03	-
授業項目	関心⑦	標準偏差	関心⑧	標準偏差	関心⑨	標準偏差	関心⑩	標準偏差	関心⑪	標準偏差		
初回	3.89	0.831	4.01	0.824	3.88	0.837	4.08	0.876	4.47	0.628		
最終回	4.26	0.804	4.21	0.704	4.01	0.779	4.13	0.753	4.58	0.585		
差	0.37	-	0.20	-	0.13	-	0.05	-	0.11	-		

図－１ 授業項目別：理解（初回・最終回平均点）



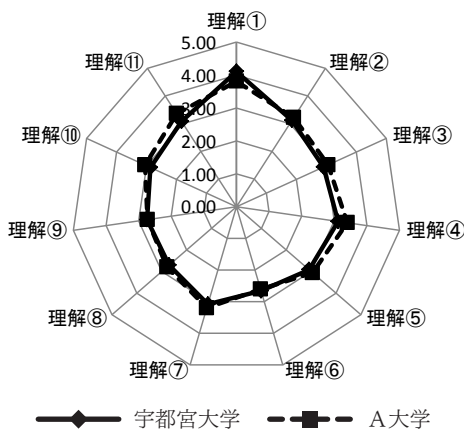
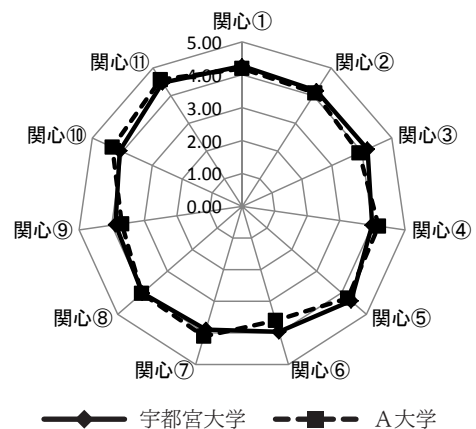
図－２ 授業項目別：関心（初回・最終回平均点）



表－１及び図－１から明らかなように、理解度が全ての項目で上昇している。特に、授業項目⑥（新規創業）と⑧（労働法）の初回と最終回の平均点差は大きく、これらに対する学生の当初の理解が低かったこともわかる。また、⑨（労働組合）に関しても当初の理解は低い、②（若者雇用）等と同程度の高まりを示している。

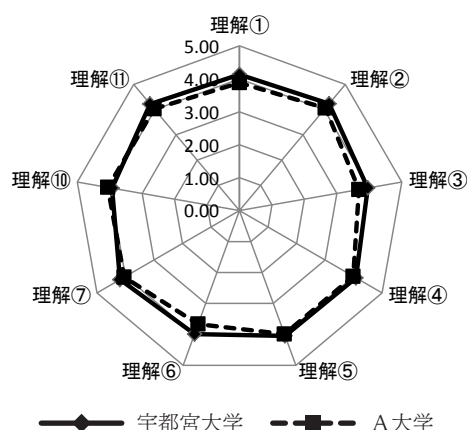
関心については表－２及び図－２の通り、理解度ほど顕著な違いはないが３項目を除いて全て上昇している。⑦（男女雇用機会均等）についてはもっとも大きく関心度が上がっている。次いで⑧（労働法）、②（若年雇用）についても高まっている。一方⑥（新規創業）については理解度が上がったが関心度の伸びは低く、授業時に関心の高い学生が増加している印象はあったもののまだそういう学生数は少ないということを表していると考えられる。

ちなみに、項目別の理解と関心の度合いの傾向が調査した宇都宮大学に特殊なものなのかどうかを、前項で述べた規模等の異なるＡ大学との比較により検討してみると、理解、関心とも同じような傾向（図－３～図－６参照）となっており、大学間での傾向にあまり違いはないことが推測された。なお、Ａ大学においては時間的制約もあり授業項目⑧⑨に替えてキャリア教育授業の実施に特化した授業を実施したため⑧⑨は最終回調査の比較項目から除いてある。

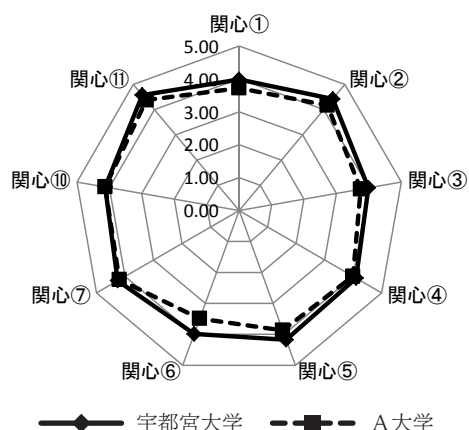
図－３ 授業項目別：理解（初回平均点）  
宇都宮大学とＡ大学比較図－４ 授業項目別：関心（初回平均点）  
宇都宮大学とＡ大学比較



図－５ 授業項目別：理解（最終回平均点）  
宇都宮大学とA大学比較



図－６ 授業項目別：関心（最終回平均点）  
宇都宮大学とA大学比較



#### b ウィルコクソン検定結果

次いで、理解度と関心度の授業項目ごとの変化をウィルコクソン検定を行い検証したところ、表－３の通りであった。授業項目①（授業のねらい）以外のすべての項目で理解度が平均点の上昇だけでなく統計的にも有意に上昇していることが立証された。また、関心度については、①（ねらい）～③（企業の経営の変化と働き方の多様化）と⑦（男女雇用機会均等）、⑧（労働法）が平均点での差が出ていたが、この差が統計的にも有意であることが認められた。うち、②（若年雇用）、⑦（男女雇用機会均等）、⑧（労働法）については授業後の関心度が上昇し、①（ねらい）と③（企

表－３ 項目別（理解・関心）ウィルコクソン検定結果

有意差有り			有意差なし
分析項目	Z 値	有意確率 (両側)	分析項目
②理解：初回－②理解：最終回	-6.709 (a)	P<0.01	①理解：初回－①理解：最終回
③理解：初回－③理解：最終回	-5.882 (a)	P<0.01	④関心：初回－④関心：最終回
④理解：初回－④理解：最終回	-5.673 (a)	P<0.01	⑤関心：初回－⑤関心：最終回
⑤理解：初回－⑤理解：最終回	-6.156 (a)	P<0.01	⑥関心：初回－⑥関心：最終回
⑥理解：初回－⑥理解：最終回	-6.834 (a)	P<0.01	⑨関心：初回－⑨関心：最終回
⑦理解：初回－⑦理解：最終回	-6.569 (a)	P<0.01	⑩関心：初回－⑩関心：最終回
⑧理解：初回－⑧理解：最終回	-6.686 (a)	P<0.01	⑪関心：初回－⑪関心：最終回
⑨理解：初回－⑨理解：最終回	-6.299 (a)	P<0.01	a. 負の順位に基づく b. 正の順位に基づく
⑩理解：初回－⑩理解：最終回	-6.118 (a)	P<0.01	
⑪理解：初回－⑪理解：最終回	-6.549 (a)	P<0.01	
①関心：初回－①関心：最終回	-3.458 (b)	P<0.01	
②関心：初回－②関心：最終回	-2.944 (a)	P<0.01	
③関心：初回－③関心：最終回	-2.006 (b)	P<0.05	
⑦関心：初回－⑦関心：最終回	-3.523 (a)	P<0.01	
⑧関心：初回－⑧関心：最終回	-2.084 (a)	P<0.05	

業の経営の変化と働き方の多様化)については関心度が下がっている。①(ねらい)は授業のねらいであるので授業後に下がることもありえようが、③(企業の経営の変化と働き方の多様化)の低下については、内容的にも多岐にわたり専門的な話も含まれ時間も要したためにモチベーションが低下したのかもしれない。一方、有意差が出なかった項目は、⑤(企業人の話)を除いてすべて平均点は授業後に高くなっていたが、⑤(企業人の話)については、アンケートの調査項目の表現が授業前後で異なっていた点(授業前;企業で働くということ、企業が望む人材、授業後;企業の人の話)が影響しているのかもしれないし、また、企業人の話は聞き終われば完結して関心そのものは低下するのかもしれない。

### c Spearmanによる相関分析結果

次に、授業項目間の関係を見るために、Spearmanによる相関分析を行った。

ここでは、2種類の相関を見ている。(a) まず一つは、一つの授業項目を理解したことにより他の項目の理解が進むかどうか、授業後の理解度同士の相関である。(b) もう一つは、一つの項目の理解が進むと、他の項目の関心が増すかどうか、授業後の理解度と他の授業の関心度の相関である。結果は表-4及び表-5の通りである。

表-4 授業後理解度の相関分析結果 (Spearman)

N=85

	①理解	②理解	③理解	④理解	⑤理解	⑥理解	⑦理解	⑧理解	⑨理解	⑩理解	⑪理解
①理解	1.000	.569(**)	.571(**)	.546(**)	.491(**)	.571(**)	.439(**)	.431(**)	.497(**)	.483(**)	.561(**)
②理解	.569(**)	1.000	.469(**)	.464(**)	.443(**)	.307(**)	.400(**)	.555(**)	.436(**)	.499(**)	.415(**)
③理解	.571(**)	.469(**)	1.000	.562(**)	.418(**)	.420(**)	.532(**)	.421(**)	.481(**)	.449(**)	.413(**)
④理解	.546(**)	.464(**)	.562(**)	1.000	.419(**)	.385(**)	.421(**)	.458(**)	.330(**)	.405(**)	.402(**)
⑤理解	.491(**)	.443(**)	.418(**)	.419(**)	1.000	.340(**)	.414(**)	.257(*)	.341(**)	.605(**)	.398(**)
⑥理解	.571(**)	.307(**)	.420(**)	.385(**)	.340(**)	1.000	.414(**)	.312(**)	.401(**)	.338(**)	.437(**)
⑦理解	.439(**)	.400(**)	.532(**)	.421(**)	.414(**)	.414(**)	1.000	.364(**)	.428(**)	.571(**)	.440(**)
⑧理解	.431(**)	.555(**)	.421(**)	.458(**)	.257(*)	.312(**)	.364(**)	1.000	.610(**)	.369(**)	.324(**)
⑨理解	.497(**)	.436(**)	.481(**)	.330(**)	.341(**)	.401(**)	.428(**)	.610(**)	1.000	.494(**)	.360(**)
⑩理解	.483(**)	.499(**)	.449(**)	.405(**)	.605(**)	.338(**)	.571(**)	.369(**)	.494(**)	1.000	.557(**)
⑪理解	.561(**)	.415(**)	.413(**)	.402(**)	.398(**)	.437(**)	.440(**)	.324(**)	.360(**)	.557(**)	1.000

\*\* p<.01 \* p<.05

表-5 授業後理解度と授業後関心度の相関分析結果 (Spearman・一部抜粋)

N=85

	①関心	②関心	③関心	④関心	⑤関心	⑥関心	⑦関心	⑧関心	⑨関心	⑩関心	⑪関心
①理解	.569(**)	.283(**)	.438(**)	.359(**)	.419(**)	.394(**)	.408(**)	.307(**)	.476(**)	.500(**)	.312(**)
②理解	.417(**)	.463(**)	.388(**)	.392(**)	.337(**)	.282(**)	.403(**)	.358(**)	.293(**)	.379(**)	.294(**)
③理解	.348(**)	.288(**)	.642(**)	.364(**)	.297(**)	.404(**)	.359(**)	.480(**)	.451(**)	.396(**)	.221(*)
④理解	.289(**)	.215(*)	.444(**)	.608(**)	0.211	.248(*)	.364(**)	.346(**)	.400(**)	.340(**)	.359(**)
⑤理解	.269(*)	0.201	.324(**)	.221(*)	.622(**)	.313(**)	.238(*)	.330(**)	.340(**)	.512(**)	.319(**)
⑥理解	.429(**)	0.024	.322(**)	0.129	.271(*)	.604(**)	0.112	0.142	.361(**)	.473(**)	.282(**)

⑦理解	.389(**)	.238(*)	.456(**)	.373(**)	.291(**)	.316(**)	.633(**)	.394(**)	.444(**)	.553(**)	.517(**)
⑧理解	0.170	.224(*)	.388(**)	.380(**)	.284(**)	0.144	.259(*)	.624(**)	.551(**)	.377(**)	.246(*)
⑨理解	.394(**)	.339(**)	.485(**)	.407(**)	.327(**)	.323(**)	.386(**)	.535(**)	.746(**)	.491(**)	.281(**)
⑩理解	.326(**)	.274(*)	.419(**)	.277(*)	.412(**)	.247(*)	.397(**)	.374(**)	.494(**)	.640(**)	.446(**)
⑪理解	.519(**)	.307(**)	.253(*)	.268(*)	.416(**)	.281(**)	.416(**)	.296(**)	.379(**)	.486(**)	.514(**)

\* \* p&lt;.01 \* p&lt;.05

## (a) 授業後の理解度同士の相関

いずれの項目間においても、相関が見られた。特に①（授業のねらい）と③（企業の経営の変化と働き方の多様化）は他の全ての項目に対して中程度の相関が見られた。①は授業のねらいでありその内容の理解が高まることで各回の授業項目への理解を高めていることが考えられ、③（企業の経営の変化と働き方の多様化）についても、あらゆる労働の問題に関わる基本的な知識を扱っていることがその理由として推察される。⑦（男女雇用機会均等）や②（若者雇用）は学生の関心が高いテーマであり、相関の状況を見てもほとんどの項目で中程度の相関がある。一方、低い相関が出ているところは、例えば⑥（新規創業）や⑤（企業人の話）と⑧（労働法）との関係など、学生が関連性を感じにくい内容となっていたことが推察される。

また、各授業項目の理解が高まると、自分のキャリアデザインや働くということを考える⑩（キャリアとは、職業とは、働くとは）、⑪（自分らしい進路選択や就職に必要なこと）の理解も高まるのかについては、⑩と⑪についての相関を見る限りでは他の授業項目との関係が特に高いわけではなく他と同じような相関傾向を示している。⑪（自分らしい進路選択や就職に必要なこと）と、⑧（労働法）や⑨（労働組合の話）理解の相関についてはむしろ低い相関となっていた。これは、春闘なども下火となり学生に労働組合というものが認知されにくくなっていること、そういう分野が自分の職業生活に結びつけて考えられていないということかもしれない。

## (b) 授業後の理解度と関心度との相関

理解の④（働く人の変化）、⑤（企業人の話）、⑥（新規創業）、⑧（労働法）の一部で相関が見られない部分があったほかは、全ての項目間で相関があることがわかった。その中で⑧（労働法）と⑨（労働組合）についても理解と関心に相互に中程度の相関があることがわかった。また、同一の授業項目については、当然とはいえ、授業後の理解度と関心度については各項目とも中程度の相関が認められた。特に、⑨（労働組合）の理解と関心との関係については高い相関が認められた。

⑩（キャリアとは、職業とは、働くとは）及び⑪（自分らしい進路選択や就職に必要なこと）に関しては、⑤（企業人の話）、⑥（新規創業）、⑦（男女雇用機会均等）、⑨（労働組合の理解）の各項目の理解が⑩（キャリアとは、職業とは、働くとは）の関心と中程度の相関、⑪（自分らしい進路選択や就職に必要なこと）の関心に関しては⑦（男女雇用機会均等）の理解との間に中程度の相関が見られた。

## 3-(2) レポート分析の結果（仮説②～④）

労働問題についての授業が受講生の理解や関心を高めたことがアンケート調査結果からわかった。しかし、労働に関する授業各項目と自分のキャリアに関わる⑩（キャリアとは、職業とは、働くとは）、⑪（自分らしい進路選択や就職に必要なこと）との相関については相関の有無やその程度のみしか結果が得られず、その詳細は明らかではない。労働問題への理解が、己の将来の進路選

択、キャリア形成を考える際にどのような効果があるのかを、今度は、受講生のレポート（授業に対する感想）の内容を分析することによって定性的に検証してみたい。

レポートで記載を求めた質問項目は以下の通りである。

1. この授業を受けてわかったこと、印象に残ったこと、役に立ったこと、良かったことは何ですか？
2. 特に、自分の将来の進路について、考えたことや、授業を受けてそれまでの思いと変わったことがあれば書いてください。
3. 授業でわからなかったこと、授業に対し改善の必要があると思うこと、要望などをご記入ください。
4. その他、感想など、自由にご記入ください。

ここでは質問1と2について、学生のコメントを内容に応じて、「労働に関する知識や問題意識」、「働くということ、キャリア、就職など将来のキャリア形成への思いへのつながり」、「大学生生活や進路選択・就職活動の具体的な行動へのつながり」、「他者との関係性の構築」、の4つに分類しそれぞれ代表的な回答を列挙した。なお、質問4の中で1に該当するものも多く見られたため、それぞれを質問1の該当部分に加えた。（ ）内は学生のコメント例である。紙幅の関係で意味を変えない範囲で要約してある。

また、「労働に関する知識や問題意識」の中の「a 労働の様々な実態と問題点の理解」については、労働法や労働組合についてのコメントが予想以上に多かったこと、新規創業については前述したようにキャリア教育の中で起業家精神育成のための教育が重要であると考えていることと少数ながらもコメントが出てきたことから、別項目bとcとして分類した。全回答数は237件（複数回答）であり、分類結果は以下の通りである。

### 3-(2)-1 質問1

#### <労働に関する知識や問題意識>

##### a 労働の様々な実態と問題点の理解（後述bとcを除く） 回答数123

①これまで知らなかったことを知ることができた（普段の生活では考えてこなかった社会に出るために必要なことを学んだ）②リアルな生身の人間に触れる体験（フリーターへのインタビューとグループワークで多様なケースがあることが分かった、イメージだけで決めつけていた、百聞は一見）③多様性の理解（働き方多様、ずっと一つの会社にいるのではなくて転職もあっていい）④自分の問題としての認識（男女差別がどこまで許されるか深く考えられてよかった、女性が思ったより働きやすくなっていた、男女の労働問題を自分の問題と考えていきたい、社会、世の中が変わってきて今後も変わり続けていくであろうということが授業を通してよくわかりその中で自分の知識を深めキャリアについて考える機会ができた）⑤社会が問題に対処していることの理解（社会が思っている以上にフレキシブルで調整しようとしている、就職や職場環境の改善のために法律や労働組合が闘っていた、社会も労働者を大切にしていること、当事者が知らないだけで問題解決の筋道と方策が示されていること）⑥調べる、勉強する意欲へのきっかけ（メディアを利用して理解を深めていく、自分で考え調べることの大切さを理解、もっと知りたいという思い、働くということについて考え調べ様々なことを学べたことはよい経験）

以上の結果から、学生たちが講義や体験により労働に関わる様々な実態と問題を理解したことがわかるが、それらを単発の労働に関する知識として理解しただけではなく、多面的にあるいは統合的に理解しており、その結果次のステップへつなげられる可能性があることがわかる。上記③や⑤のコメント例を見ると、就職についての思い込みや社会が硬直的で人に対して対立的であるというような認識をしていて消極的・否定的な社会との関わり方になっている学生に気づきがあったことが推察される。

#### b 労働法・労働組合の内容と役割の大切さの理解 回答数31

①知らなかった分野を知ることができてよかった（労働組合の人とその話が印象的、とても役立った、いざという時に労働組合が頼りになることを認識、アルバイトの現在と今後の就職に生かしたい）②自分の行動との関わり（労働法が守られていないときは自ら行動したい）③初めての体験（労働法難しいのでもっと時間が必要）

以上については、労働法や労働組合について、31名が社会に出て、或いはアルバイトの現場で、自分を守り、また、環境を変革していくときのツールとして重要であると認識したことがわかった。これまでこういう情報をあまりに知らなかったということも推測できる。

#### c 新規創業、起業家精神の理解 回答数6

①必要、重要、印象的 ②身近に感じる（案外簡単にできることを知った、身近だった）③ベンチャー企業の人への考えが変化（夢を追いかけている人たちだった）④自分の生活との関わり（チャレンジするリスクも取る起業家精神は自分の生活においても必要な心がけで学べてよかった）④初めての体験（初めて聞いたが実感わかず）

以上の結果から、数は少ないながら、自分の生き方・働き方との関わりで理解している学生がいること、思ったより身近であるとして将来展望の視野に入ってくる可能性があること、一方でこれまで全く知らなかった分野のために、初めて聞く話として実感わかない・想定できない学生も、この欄に回答しない者も含めて多いと言えよう。

#### <働くということ、キャリア、就職など将来のキャリア形成の思いへのつながり> 回答数49

①認識の深まり（キャリアとは様々な経験を積み上げていってこそ意味がありただ資格を取ったというのは通用しない、視野が広がった、将来像を考える良いきっかけ、働く意味や目的の細分化を知り自分にとって働くことの意味を考えるようになった、社会のことをしっかりと考えるようになった、社会の状況を知ることによって自分のキャリアデザインに繋がっていく、自分の意志でキャリアを決めることが重要と分かった）②態度や意欲の変化（キャリアについての考え方が前向きになった、社会の一員としてどう生きていくのか何が必要かを考え自分のライフスタイルを見直したい、四年後の就職に不安があったがこの授業でさまざまな知識を得て不安感とともに社会に出るのが楽しみのようになった、仕事に関する見方が大きく変わった、失敗やミスを犯してもめげないあきらめないという志をベンチャー企業から学んだ）③学業、大学生活への意欲の高まり（専門知識が就職後に有用と分かった、わかりやすく雇用の様々な話を聞いたことは将来の展望を築き上げるモチベーションとなった）④進路選択に向けてやるべきことの理解（1年の今の時期から世の中に興味関心を持ち自分の専門分野ではないことに（たとえば経済）にも知識を蓄えていくというようなことが



大学生活含めこれからの社会で必要になるということが分かった、働くことについて考え調べるきっかけとなった、時代の流れにより雇用・働き方が変わることが分かったので様々な課題に目を向けて行かなければならないと感じた)

以上からは、労働に関する知識やインタビューなどの体験がさらに自分の将来への思いに繋がっていていることが見てとれる。特に、④の学生のコメントや②のベンチャー企業から自分の生き方を学んだというコメントがそれらを表している。また、知識を持つことが不安の払しょくにつながることもわかる。

#### <大学生活や進路選択・就職活動の具体的な行動へのつながり> 回答数19

①自分が行動する(レジュメを見ながら先生の話聞くことで自分なりの意見を持つと新聞に目を通したり関連する話題について調べ始めた、労働環境の改善には何をすべきかを考え提案できるような知識・勇気をつけたい、女性として問題あるがそんなこと気にせず生きられるような社会であってほしいしそうなるように頑張りたい、新聞についてのレポートの時に普段は読まない新聞を読んで新聞についていろいろなことが書いてあって社会を知ることができる身近なアイテムと気づいたり家族が思ったより多く社会の知識を知っていて自分はこんなに多くの知識を学べるか不安になった、将来のために大学で経験出来ることはいろいろやっていきたい、様々なことに對し自分で考え調べることの大切さを知った、大学に入学し私はアルバイトを始め人生で初めて“労働者”という立場になったのでこの授業で学んだことを心に留めて一労働者として責任を持って仕事をしたい、授業を自分にとってとても有意義なものにすることができ、他の科目への取りくみにも変化が起きていると感じている)

②社会・企業を変える(労働環境の改善には何をすべきかを考え、提案できるような知識、勇気をつけたいと思った、社会が自分の働く場所と言うだけでなく自分たちのために変えていける動きのあるものだという印象を持った)

以上から、前述の労働の理解や将来のキャリア形成へのつながりがさらに具体的な行動につながっていく可能性をみることができる。また、自分のみならず、社会を変えるという発想が出てきている。

#### <他者との関係性の構築> 回答数6

①フリーターへのインタビューと話し合いの中での多様な人との交流、意見交換・共有体験の喜び(自分と異なる人の意見聞けて良かった、いろいろな考えの人がいる、他学部他学科の人と交流ができたことがめったにないことだったので楽しかった)

以上のようなコメントがここで複数寄せられることは想定していなかったものであり、友人やクラスメートとの意見交換や情報共有の機会、他学科・他学年との交流機会が、今の大学生の日常生活において如何に少ないかということが推測され、教育の場面での設定の必要性が感じられる。

### 3-(2)-2 質問2

これは、特に、働くということ、キャリア、就職のことなど将来のキャリア形成への思いに絞った質問項目である。

回答を分類してみると以下の通りである。各項目欄の( )内は学生のコメント例である。紙幅



の関係で意味を変えない範囲で要約してある。 回答数136

①視野、選択肢の拡大 回答数35

(第1志望にこだわらず「新たな選択」も重要、とにかく大手と考えていたがベンチャー企業などの役割を学んだあとで考え直すと大企業に入れば良いというわけではないことがわかった、いろいろな働き方を学び視野が広がった、工学部だが就職先は工業だけないと知り選択肢が広がった、何をしたいのかももう一度考えてみる、思いもよらない就職先があるかもしれない、教育分野でもベンチャーと無縁ではないと分かった、ベンチャー企業の講義を聞いて選択肢が増えた、専攻分野から職種を決めつけていて自ら可能性と視野を狭めてしまっていた、院に行くことだけを考えていたがこれからは自分のやりたい仕事に合わせた進路選択をしていきたい、安定した収入と言うことで公務員と思っていたが自分の選択肢は広いと実感し可能性を試してみたい)

②具体的な行動の開始、決意 回答数10

(学生だからこそその視点や経験を得るため夏からバイトする、進みたい道がないなら自分で作ってしまえばいい、知るべきことは多い自分から動いて吸収して行こう、働くことに関するニュースに注意して聞いたり調べたりすることが増えた、インターンシップに参加する)

③明るい展望を持てた 回答数3

(明るい未来が見えた、知識が広がり不安が解消された、自信につながった)

④学びの大切さの認識、具体的な学びへの意欲 回答数6

(失敗の後の学び大切、将来を見据えて専門をしっかり学ぶ、起業のために経営学を学ぶ、知識増やしたい)

⑤進路の目標の明確化 回答数5

(興味の或る分野を発見でき就職と言う明確な目標目指して大学生活を送れるようになった、多くの女性が社会進出しており自分も能力を生かし働く女性になりたい、入学して将来の目標を見失っていたが授業を通じて就職がスタートと考えるようになってまたやりたいことを思い出し研究を存分にやってその後それを生かした就職をしたいと考えるようになった)

⑥将来について真剣に深く考えるきっかけ 回答数27

(働くことの意味が分かり時間をかけて何がやりたいか・できるか・すべきかを見つけていこう、今後について真剣に考えるようになった、なんとなくの人生の中で今から夢を見つけて何が今できるか考えたい、将来設計をしっかりするうえで自分の働き方だけでなく共に働く様々な人の働き方を理解すると仕事の効率も変わるというように視点が変わった、日本企業の変化の中でもっと真剣に進路を考え人と違う人材を目指したいと思うようになった、強い意思なく進学して楽しい生活をしているがもっと将来を見通して明確な目標を持つことが大切と考え直した、フリーターをしてでも生きていけると軽く考えていたが甘い考えを改めることができた、この先どう生きていくのかについて非常に考えさせられた、授業を通して働くことについて考える機会が増えたのでキャリアデザインを考え社会に関心が持てるようになった、家庭と仕事の両立をどうするか今から考えていきたい)

⑦進路選択時に考えるべき大切な点や心の構えについての理解 回答数23

(就社でなく何がやりたいかが大切、給料ではない、今すべきことを考える、しっかり選択理由を考える、自分の将来について何もやりたいことがないと言っていたが何も知らないでそのようなことを言っていたことがわかった、親から公務員といわれていたが、自分の希望を第1に考えたいと

言う思考に変化した、自分が社会の一員としてどう生きていくのか何が必要かを考えライフスタイルの見直しをしていきたい、授業前は仕事に就くことがゴールだと思っていたがいまは自分に合った仕事を見つけて適応していくことがゴールだと思っている)

⑧進路選択や就職への取り組みの時期ややるべきことを考えるきっかけ 回答数15

(社会の変動をよく見て早いうちから企業を調べて準備しなければならないと考えるようになった、なんとなく就職を希望するのはよくないしっかりニュースを見たりどんな労働や研究があるのか把握して選択したい、研究職に就きたいので今の段階から情報収集して自分に必要なものを知りたい、一年生から学んで知っておかなければならないことに気付いた、関心を持ったベンチャー企業について進路を決める前に調べておきたい、社会に出る前に労働法をもっとしっかり読んでおきたい、企業の実態についてもっと深く考えたい、インターンなどに参加して多くの情報を得ることが大切、社会への関心を持ちもっと職業知りたいたのでまずはアルバイトとして働くとはどのようなことかを考えたい、就職に役立つ知識が増えたので生かそうと思った)

⑨進路の現実の厳しさの認識と決意 回答数1

(志望先の採用状況が厳しいことが分かったががんばる)

⑩将来への不安の増大 回答数2

(自分で道を切り開くことへの不安が増した)

⑪就職後のとるべき対応への理解 回答数2

(会社に対して自分が変わる努力もあるが会社を変える努力もある、問題が発生したときには相談機関に行く)

⑫教員としての決意 回答数3

(自分の経験を踏まえ生徒には悔いのない選択をしてもらえるようキャリア教育を行う、義務教育の中で職業教育があまりに不足している、起業も含めもっと子供に様々な将来の選択肢を考えさせる教育をすべき)

⑬その他 回答数4

(もっと早くこの授業を受けるべきだった、フリーターへのイメージが良い方に変わった、今後の新しい労働法への気づきがあった)

以上の通り、多くの学生が視野の拡大や選択肢の拡大、現実の行動へのつながり、学業への意欲、さらには就いた職業での態度・心構えにもつながって考えていた。また、将来を真剣に深く考えるようになったと答えた学生が最も多く、個々の学生のコメントの内容を見ると有意義な変化が起こっていることがわかった。労働問題についての学びをきっかけに進路選択や就職活動で考えるべきことや取り組み方を考えていることが見てとれ、この授業の所期の目的を達成できているといえよう。教員養成の課程の学生については、過去に起業等の別の関わり方で教育に携わっていくという可能性を見出したケースもあったが、ここにあるようにキャリア教育を担う教員として自分のやるべきことに思い至った学生が複数いたことは重要である。また、「フリーターへのイメージが良い方に変わった」というコメントが複数の学生からあったが、フリーターへのインタビューの結果、しっかりした計画の下にフリーターという生き方を選び努力している姿に触れた場合にこういう感想を持つ学生がおり、正社員だけが選択肢ではないと考える者もいる(この場合、自分の生き方への明確な意思と非正規雇用への正しい認識を持ったうえで判断するよう個別相談等での指導が必要となろう)。

## 4 考察と今後の課題

本研究は、今起こっている労働の様々な問題を、産業・職業、企業経営の動向、働く側の意識・行動等幅広い観点から多面的に理解するためのキャリア教育の一つの授業の教育効果を検証するものであった。個別の労働問題の理解だけでなく、さらに、それを通じて個々の学生が主体的に自らの将来のキャリア形成を考えキャリアをデザインし具体的な進路選択をしていくことや、そのために今何をすべきか、さらには職業人となった後にも何をすべきかを考えることに繋がっていく、という教育効果の検証である。「労働問題の理解」は、キャリア・ガイダンスやキャリア・カウンセリングとして支援すべき6つの分野（自己理解、職業理解、啓発的経験、選択や意思決定、方策の実行、追指導・適応指導）の中の「職業理解」や「仕事理解」と言う言葉で、従来より自己理解と並ぶ重要な最初のステップとして（木村、2003）、各学校種で行なわれているキャリア教育の中でも重要なステップとされている。しかし、現実には世の中にどんな業界・職業があるのか、自分に向いているのは何かを見つけるための業界調べや職業調べ、職業人の講話として行われていることが多い。本研究での「労働問題の理解」とは、個別の労働の実態や対策・課題にはそれぞれ様々な社会・経済・政治や人々の意識・行動のダイナミックな動きが背景にあり、そうしたダイナミズムを理解しそのような社会の一員として生きていくのが自分であることを認識し、そこから社会を支え、また、変えていくのは他ならぬ自分たちであるということを自覚・実感することであると考え、授業を展開してきた。こうした考え方に立って、様々な労働問題を多面的に扱うキャリア教育授業はあまり実施されてこなかったと思われ、その教育効果についても検証したものはないと思われる。

今回の調査結果の分析から、労働問題の授業項目ごとに学生の理解が高まり、また、一部を除き関心も高まったことがわかった。また、一つの授業項目の理解が別の項目の理解を深めたり、関心を引き起こすなど、相互に影響を及ぼしあって理解が進んでいくことがわかった。さらに、個々の労働問題の学びが自分のキャリア、働くということ、職業等についての理解と関心に結びつくという点についてはアンケート調査からは明確にはなかったが、レポートの分析からは、就職にせよ、進学にせよ、将来のキャリアデザインに向けて考えるきっかけになっていることと大学生活でやらなければならないことの理解が進み、学業等への意欲が上がっていること、就職後の社会や会社の問題の改善に主体的に取り組んでいこうとする姿勢も見られたこと、がわかり、そして、それらの変化が日常生活の中で具体的な行動に結びついていることが見られた。

「3 調査結果」で紹介した次のような学生の代表的なコメントからも推測されるように、労働問題を切り口とするこうした教育が、キャリア教育において多様な意義と可能性を持ち得ることが明らかとなったといえよう。

- ・大学に入学し、私はアルバイトを始め、人生で初めて“労働者”という立場になった。この授業で学んだことを心に留めて、一労働者として責任を持って仕事をしていきたいと思った。
- ・この講義を受けて労働とか社会だけでなく、様々なことに対し、自分で考え調べることの大切さを知った。
- ・社会が自分の働く場所と言うだけでなく、自分たちのために変えていける動きのあるものだという印象を持った。

また調査結果からは、労働法や労働組合についてのいわゆる労働法教育の必要性と可能性が示さ

れた。さらに、起業家教育の効果や可能性、グループワーク等の学生の意見交換や交流の機会の必要性も示唆された。

今後の課題としては、まず、教育効果について、授業直後だけではなくその後の進路選択、就職活動、さらには、職業生活の中でどのような効果を及ぼしているかの長期的な測定が必要である。また、授業の中のどの要素がどのような効果を生むのか、さらに詳細な検討が必要である。また、アンケート調査結果からは、例えば「男女雇用の実態や対策」の理解の高まりが「自分らしい進路選択や就職に必要なこと」の関心を高めているらしいことや、逆に項目によって学生にとっては関連性の認識が得にくく理解しにくい場合があることがわかった。こうしたことを踏まえ学生にとって理解しやすい授業展開の工夫が今後必要である。また一方で、自分に自信を持っていない学生や社会へ出るレディネスが低い学生にとって、社会の現実を知ることが逆に不安感を掻き立て、更に自信喪失に陥らせる可能性もあり、現実の授業では、教員が毎回のリアクションペーパーを見ながら、次の回の授業で調整してきた。こうした授業時のきめ細かい対応とともに、個々人の特性と教育効果の関係の検証が今後の課題で、その成果を実践につなげていく必要がある。

## 謝辞

本研究に際して、統計分析と結果の整理に多大のご協力をいただいた神田外語大学大学院学術研究員の町田なほみ氏に感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 乾 彰夫 (2012)「キャリア教育は何をもたらしたのか」『現代思想』 Vol 40-5 pp101-109
- 上西 充子 (2015)「学校現場への実践的な労働法教育の導入は可能か」『現代思想』 Vol 43-8 pp64-74
- 木村 周 (2003)「キャリア・カウンセリングー理論と実際、その今日的意義ー改訂新版」雇用問題研究会
- 経済産業省 (2007)「「社会人基礎力」育成のススメ～社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して～」
- 厚生労働省 (2009)「今後の労働関係法制度をめぐる教育の在り方に関する研究会報告書」
- 児美川 孝一郎 (2007)「権利としてのキャリア教育」明石書店
- 児美川 孝一郎 (2010)「「若者自立・調整プラン」以降の若者支援策の動向と課題——キャリア教育政策を中心に」労働研究雑誌No602 pp17-26
- 児美川 孝一郎 (2014)「日本型就職・雇用モデルの崩壊と教育の課題」『DIO連合総研レポート』 292 pp4-7
- 末廣 啓子 (1998)「米国における起業と教育」『子供の教育と家計の動向』国民金融公庫総合研究所 pp39-50
- 末廣 啓子 (2013a)「キャリア教育は何を目指すのか～大学のキャリア教育の現場から思うこと～」『下野教育』 No743 pp4-9
- 末廣 啓子 (2013b)「キャリア教育の現場から見えること」『Business Labor Trend』 2013.12 労働政策研究・研修機構

中央教育審議会（2008）「学士課程教育の構築に向けて（答申）」

中央教育審議会（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」

濱口 桂一郎（2009）「新しい労働社会－雇用システムの再構築へ」岩波書店

本田 由紀（2009）「教育の職業的意義——若者、学校、社会をつなぐ」ちくま書房

本田 由紀（2014）「いま求められる労働法教育— 調査から見える効果について—」

『POSSE』Vol 23 pp120-131

溝上 慎一（2013）「将来展望と日常生活との接続が学習に与える影響—接続尺度の開発を通して—」

『キャリアデザイン研究』Vol 9 pp65-78

## 参考資料 1

「人間と社会」授業内容

- 1 インTRODakション（授業のねらい・注意事項など）
- 2 いま、はたらくとは何か（現実を認識し、働くことの意味を問い直す）
  - ①・若年者の雇用・失業問題とその対応①（高水準の完全失業率・離職率、ニート・フリーター問題の実態・背景・問題点と対応策、若者のくらし等）
    - ・宿題；親しいフリーターへのインタビューとその結果のレポート作成
    - ・若年者の雇用・失業問題とその対応②（インタビュー結果に基づくグループワーク、フリーターの生き方、メリット・デメリットなどを話し合いその後全員で共有、若年者雇用に関する対策）
  - ②産業・職業、企業の経営・人事戦略の変化と、働き方の多様化（「終身雇用」の変化、就業・雇用形態の多様化の背景と実態、パート労働、派遣労働に関する様々な問題と対策、テレワークなどの新しい働き方）
  - ③働く人の側の変化（高齢化・少子化、女性の社会進出、外国人労働者問題）
  - ④労働関係記事についてのグループによる意見交換（各自が関心のある記事を捜し、要約・感想・意見を記載したレポートを持ち寄り、それらに基づいて話し合う）
  - ⑤今、会社はどうなっているのか、若者へ何を期待するか（企業の人事担当者の講義と意見交換）
  - ⑥ベンチャー企業等新規創業の実態と役割（ベンチャー企業等新規創業の実態と役割、創業支援策、起業家精神育成教育（小・中・高校生向けプログラム））
  - ⑦男女の雇用機会均等、仕事と生活の両立に向けての取り組み（男女機会均等法の制定とその後の改訂の長い道のり、女性の労働の実態と問題、両立支援・少子化対策）
  - ⑧・働くときに必要な労働関係の法制度・政策（働く者を保護する労働法の仕組み）
    - ・労働組合とは；その活動内容、働く人としての思い（労働組合幹部（男女2名）の講義と意見交換）
- 3 ①キャリアとは、働くとは、職業とは
  - ②まとめ 自分らしい生き方・キャリア形成に向けて



## ■『人間と社会』 初回・最終回アンケート

## 末廣

このアンケートは 授業の評価や、内容を改善するための基礎資料とするものです。回答いただいた内容については、集計・統計処理し、データとして取扱います。決して個人が特定されることはありませんのでご協力よろしくお願い致します。

( 学 部 学 科 年 )  
( 学籍番号 氏名 )

### 1. 以下の各項目の内容をどれくらい理解していますか？またどのくらい関心がありますか？

(当てはまると思う数字を○で囲んでください)

理解度について… 5. よく理解している 4. 一応理解している 3. どちらともいえない 2. あまり理解していない 1. 全く理解していない  
関心度について… 5. とても関心がある 4. まあまあ関心がある 3. どちらともいえない 2. あまり関心がない 1. 全く関心がない

授業項目	理解 ( 高 ← → 低 )	関心 ( 高 ← → 低 )
① 授業のねらいについて	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
② 若年者の雇用・失業問題と対策 (高水準の失業率・離職率 ニート・フリーター問題)	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
③ 産業・職業 企業の経営の変化と働き方の多様化 (「終身雇用」の変化、非正規労働者の増加、パートや派遣労働など)	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
④ 働く人の側の変化 (高齢化・少子化、女性の社会進出、外国人の受け入れなど)	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
⑤* 企業で働くということ、企業が望む人材	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
⑥ 新規創業の実態と意味 (ベンチャー企業等の役割と実態、日本の状況、起業家精神育成のための子供向け教育)	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
⑦ 男女の雇用機会均等、仕事と生活の両立に向けての取り組み	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
⑧ 働くときに必要な労働法	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
⑨ 労働組合の意義と概要	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
⑩ キャリアとは、職業とは、働くとは	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
⑪ 将来の自分らしい進路選択や就職のために考えておくこと、必要なこと	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

\* 最終回アンケートでは、⑤の授業項目のみ「企業の人のお話（日立アプライアンス、藤井産業）」と内容を変更した。

平成27年10月1日受理